

水の源

2012.2

16

M I Z U N O M I N A M O T O



特集

リヤカー隊が結ぶ ココロとココロの絆

助け合い・思いやりのなかに、
自立への意欲を垣間見る。

(福島県相馬市)

フォトストーリー

すた 廃れゆく手業を復活させ、継承する

小原かご (滋賀県長浜市)

水源の里発 おすすめご当地グルメ

鹿児島県 伊佐市「伊佐の黒豚丼」

岐阜県 恵那市「からすみ」

巻頭インタビュー 水源の里へ思いを馳せる

「よそから来た人」はあくまで「よそから来た人」。

「よその人」とは、「仲良くできない」

ということではなくて、

お互いの歴史が分からないということ。



イーデス・
ハンソンさん

岐阜県白川村／白川郷の合掌造り集落

水源の里へ 思いを馳せる

「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」。
「水源の里」の理念は、双方の地域に住む人たちが
お互いの暮らしや環境への理解や感謝が通い合っ
てこそ実現します。
このコーナーでは、文化人・著名人に、
そうした「水源の里」にまつわるお話をうかがいま

【聞き手】『水の源』編集長 町井 且昌
於：天空の宿「霧の郷たかはら」

イーデス・ハンソンさん

日本の日常生活への 関心からスタート

—— 田辺市内から小1時間、周囲の山々を眼下に見下ろす場所にあつて、ここ（和歌山県田辺市中辺路）はほんとうに見晴らしがいいですね。

我が家はここよりもっと見晴らしがいいですよ（笑）。ここより、もう少し上にあるので。朝、戸をあけると霧が一面に広がる幻想的な景色が見られます。今日も、朝のうちはもっと霧が深かったんですよ。深いときは、すぐそこの山が見えないくらいです。

このあたりは最近、熊野古道で有名になりましたね。熊野古道には大きく3つのルートがありましてね、田辺と白浜の間から山へ入って熊野本宮に向かうのが「中辺路」。串本から海岸を回って、熊野川をさかのぼって、本宮に向かうのが「大辺路」、もうひとつの「小辺路」は高野山から山をいくつも越えて本宮へ。これは大変なルートですよ。

—— こういう自然の中で住まわれるのは、子どものころのインドでの生活体験が影響しているのですか。

それは大きいと思いますよ。ヒマラヤの標高二千数百メートルのところで暮らして。すごく楽しかった。おもちゃなんかで遊ぶんじゃなくて。山がおもちゃだったね。いろんな生き物もいたし。

「よそから来た人」はあくまで「よそから来た人」。「よその人」とは、「仲良くできない」ということではなくて、お互いの歴史が分からないということ。

—— ここに住まれてから、どれくらいになりますか。

今年の6月が来たら丸25年になります。最初に日本を訪れたのは私が大学生のときで、兄が10か月間、日本の大学に勤務することになったんです。「日本を実際にこの目で見てみたい!」と思い、一緒に来た。しかし観光名所ばかり回るのではなくて、日常生活はどういうものか経験したり、言葉を覚えたり、やりたいことがどんどん増えてしまつて。大学へ行っているよりもとても面白い（笑）。それでフツと思ったんだけど、「何も兄と一緒に10か月で帰らなあかんということもないし、私が残ればいい」と。

兄の勤務先が大阪大学だったので、住むところも、外国人が少ない南大阪、近鉄沿線の東住吉区の住宅地でした。阿倍野から四つ目の針中野というところで、駒川本通りという商店街があつて、ものすごく活気のある市場があるんです。そこが私の日本でのふるさとです。そこに住みながらテレビやマス

コミ関係の仕事始めて、東京や大阪を往来する生活になりました。だけど、いつかは田舎に住みたいと思っていました。仕事で地方へ行くたびに、「ここに住むのにどうだろう…」と（笑）。

地元の人たちに合わせるための無理はしない

—— そうした末、中辺路に決められたんですね。お仕事で大阪へ出られるわけですが、遠くには感じられませんか。

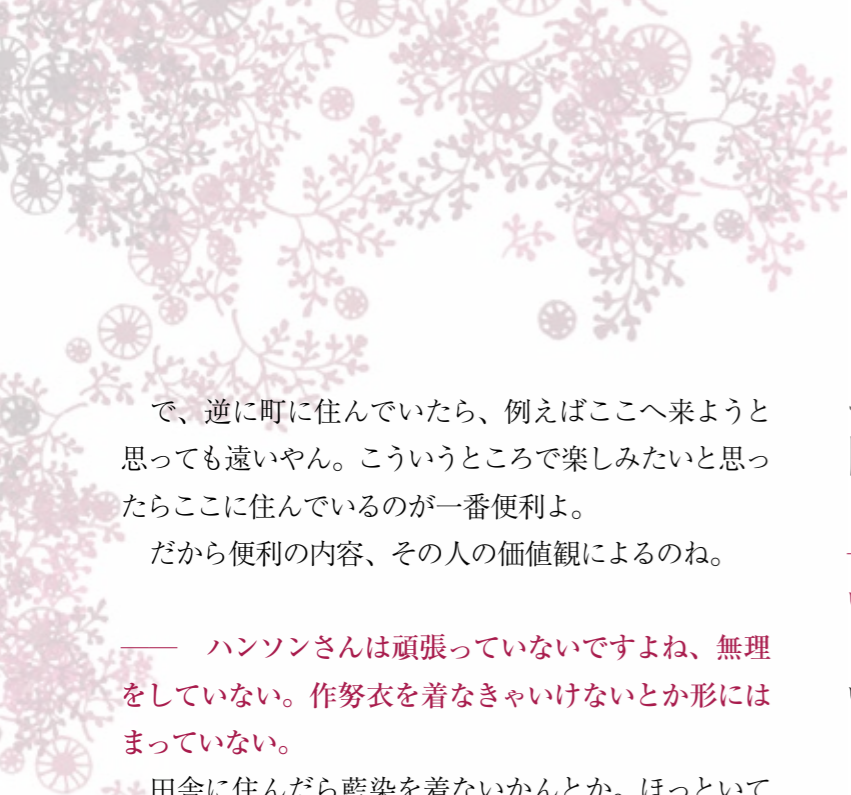
和歌山ということはもともと考えていました。山はあるし。私、地面にちょっと凸凹がないとおもわない（笑）。大阪も、比較的に近いと思う。便利過ぎたら開発が進むので、考え物ですね。

—— 便利過ぎたらダメだと。

いや、便利の中味や。交通の便でもここは便利ですよ。白浜へは便こそ少ないけど空港はあるし、新幹線に乗るのもここからだとして3時間あればいいし。その時間をムダだと考えるから不便なのね。私はムダだと思わない。本読んだり、寝たり、自分の時間や。



インド北部のマスーリ生まれ、9歳まで育つ。1960年に来日、タレント活動を開始。ユニークな大阪弁と舌鋒鋭い論評で、テレビ・ラジオ・雑誌対談などで人気を得る。1986年から1999年まで13年間にわたり、世界的な人権擁護団体「アムネスティ・インターナショナル」日本支部長を務め、支部長を退任した後は特別顧問として精力的な活動を続ける一方、1987年からは念願であった「田舎暮らし」を、2004年に世界遺産登録された「熊野古道」が通る和歌山中辺路（なかへち）町（現・田辺市中辺路町）で開始。和歌山県文化功労賞（2002年度）、京都府亀岡市生涯学習ゆう・あい賞「千登三子賞」（2008年度）を受賞。2010年度より近畿大学総合社会部の客員教授。



で、逆に町に住んでいたら、例えばここへ来ようと思っても遠いやん。こういうところで楽しみたいと思ったらここに住んでいるのが一番便利よ。

だから便利の内容、その人の価値観によるのね。

—— ハンソンさんは頑張っていないですよ、無理をしていない。作務衣を着なきゃいけないとか形にはまっていない。

田舎に住んだら藍染を着ないかとか。ほっといてくれ、何を着ようと勝手や(笑)。おいしいものをバランスよく食べる。それと寝ることやね。頑張らないこともあるけど、ところどころ頑張ってますよ(笑)。どこで頑張るか、それを自分で決められるような生活振り。それがええねん。

集落を見ても、歳とった人はここに住みたいって住んでいる人が多いんですよ。子どもが和歌山市内とか大阪へ出ていて、たまには子どものところへ出かけるけどすぐ帰ってくる。

苦しいことはあるよ。でも、畑を作るとか自分の仕事を持って生きがいをもって、生きている。ずっと昔から住んでいて、住民どうしのつながりがある。私たちはよそから引っ越してきて住んでいるけれど、多くの人は何十年も前から住み着いているんです。それで皆、血のつながりもある。同じ名字もたくさんある。

だから「一人暮らし」といっても、「どうしてるかな?」と覗く人は必ずいるし、気に掛けてくれている人も少なくないわけですよ。本当の家族でなくても頼りになる人は必ずいる。

お互いに 間合いを大切にする

—— よく田舎ではプライバシーがないとか、付き合いが煩わしいとかいいますが。

それよくいうねえ。田舎ではお互いに知り尽くして。でも煩わしいと思わへんねえ。

だから、よそから来た人たちはあくまでよそから来た人や。それでええと思うねん。「よその人」という意味は仲良くできないということではなくて、お互いの歴史が分からないということじゃないかな。そういう意味では何年経ってもよその人や。それはそれでええと思うね。

移住者がどういうふうにしてるかやけど、もちろん住民としてやらにゃならんことはいろいろあるわけね。なるべく地区の総会に出てくれとか、皆で何かをするときに手伝うとか。

最初、引っ越してきたとき、近所の人たちに「カラオケやるから来るか」って誘われて。ウチらカラオケ好きやないね。これはやりたくない、だから断ったのね。せっかくやけどウチら歌えないんですわ(笑)。飲み会にも誘われるけど、連れ合いは飲むのあまり好きじゃないし、家でゆっくり飲むのはいいけど、飲みに行くというのは好きじゃない。だから無理やり付き合わなあかんということはない。

でもお葬式があったときに、受付を手伝うとか、連れ合いは民生委員をすとか。それはできることやし。簡単なこと、顔を見たら挨拶をする、立ち話する、そういうふう自然にやればいい。



—— 無理強いしない、されないこと。お互いに間合いが大事だと。

でも声掛けてもらうのを待っている人もいるのよね。できるだけそういう呼吸に慣れていく、ということやね。言い方もあるよ。カドが立たないように(笑)。ここで生まれ育った人にはそれは難しいかも知れないけれど。

定年退職して、2年前に大阪から引っ越しして来た人がいるんだけど、自分の生活を楽しんでいるし、仲間を呼んで遊ぶし、いろいろ手伝ってくれる。

この間の大雨のとき、3日間停電やったから、水が出なくなった。引っ越してきたその人がパイプを扱うのがうまい人で、直接、沢の水をつないで助けてくれた。だからそれぞれ自分の得意技があったら皆の役に立つわけですよ。

—— ハンソンさんは沢の水を使っておられるんですか。

集落に水道組合はあるけれど、今のところ、我が家では沢の水を使っています。消毒はせず、ろ過するだけ。山の水だから利用料金はいらない。その代わりに、タンクの掃除や水元の手入れは年中自分でしなければいけない。美味しい水ですよ、とって。

集落には雑用水用にU字溝が通っていて、そこをいつも掃除して、清潔にしておく。家に水を引き込ん

で、使った水はまたそこに流すわけですよ。このごろ浄化槽を作っているところが少しずつ増えているんだけど、まだまだ少ない。

だから台所で使う水、風呂と洗濯の水、野菜をじゃぶじゃぶ洗う水はまた外へ流すわけよ。で、それが下へ流れて行くから、この高原地区で使う水はなるべく汚さないようにって。

集落の中には各家にU字溝から流れ出る水をいったん貯めておく泉水(池)がある。そこで採ってきた野菜のドロを落とすなど、いろんなことに使うの。上の集落の水が入るので、汚い水が入ると困るんですよ。U字溝は蓋がしてないからね、汚く使っているとすぐ分かる(笑)。

—— それできれいな水を使う生活が保たれる。下流のために。まさに「水源の里」ですよ。この上にはもう集落はないんですよ。

そう、ここが一番上。沢はたくさんあるし、大きい沢だから夏でもちよろちよろ流れ、涸れることはありませんね。

—— ハンソンさんにとって、ここはまさに「終の住処」ですね。

このあたりの山々の様子はゼーンぶ頭に入っている。ここは私の住むところと決めています。朝起きて、霧をまとった山々を見はらすたびに、それを実感しています。

インタビューを終えて

熊野古道中辺路ルートの高原にある休憩所でお話を聞きました。イーデス・ハンソンさんの山暮らし25年、集落での日常などをうかがいました。随所に彼女の人生観が滲み出て、肩の凝らない語り口が雰囲気をはぐしてくれました。現在、ハンソンさんは「特定非営利活動(NPO)法人エファジャパン(Efa Japan)」の理事長として、ベトナム・ラオス・カンボジアの3か国で「アジア子どもの家」を展開、子ども達への教育支援活動も実施されています。

Close-up

熊野の森に佇む 天空の宿 「霧の郷たかはら」

標高300mほどの山の中腹に位置し、地理的な特性から発生する霧が演出する幻想的な光景、雲海の彼方に浮かぶ果無山脈の眺望、四季折々で様々な表情をみせる雄大な自然の絶景で人気の宿泊施設。団体用の部屋も備えており研修等にも利用できる。浴場は男女異なる、岩風呂、檜風呂、露天風呂があり、お湯は「わたらせ温泉」を使用。食堂には昔懐かしい囲炉裏があり地元産の新鮮な野菜を中心とした田舎料理が評判。宿泊のみならず昼食・日帰り入浴も利用できる。地元の人々の交流の場ともなっていることから、地域一体となったおもてなしムードが魅力。



住所：和歌山県田辺市中辺路町高原826番地
TEL&FAX：0739-64-1900
ホームページ：<http://takahara.j-888.com/>

東日本大震災から一年。 被災地は今……。

東日本大震災から、間もなく1年。

震災復興事業を統括する復興庁が2月に発足、

震災から11か月経過して国の復興態勢がようやく整ったものの、

千年に一度の規模といわれる大震災によるダメージは大きく、

被災地域の現状は未だ厳しい状況にある。

そんななか、福島県相馬市では、リヤカーを引いて仮設住宅を回り、

食材や生活品を販売しながら身体障害者・高齢者らの「買い物弱者」を支援する

「リヤカー隊」の活動が、注目を集めている。

現代的な交通・物流手段が寸断されたなか、

「リヤカー」という昔懐かしい道具によって「絆」を深め合う相馬市取材した。



「リヤカー隊」は、県の「絆づくり応援事業」を活用した市のアイデア事業で、住民に声を掛けながら訪問することで仮設住宅でのコミュニティづくりを期待して、昨年7月にスタートした。



アルミ製の折り畳み式リヤカーを引いて仮設住宅を回るのは、市が販売兼生活支援員として臨時雇用した地元の被災者28人。相馬市内にある仮設住宅を、毎週月～金曜日の午前中、全戸に声掛け訪問のうえ、野菜や飲料、生活用品を格安価格で販売する。

運営をサポートしているのは「相馬はらがま朝市クラブ」。声掛け訪問の際に支援員が受けた肉や魚など生鮮食料品の注文に応じて商品を車で届けるほか、午後からは仮設住宅に入居している身体障害者宅を回り、掃除・洗濯を手伝ったり、話し相手になったりする。

物質的な支援はもとより精神的な支えをも担うリヤカー隊について、運営に携わる同クラブ事務局長の菊地伸吉さんと、訪問を受ける仮設住宅の組長・鈴木陽一さんに、それぞれの気持ちをお話いただいた。

福島県
相馬市

リヤカー隊が結ぶ ココロとココロの絆。

助け合い・思いやりのなかに、自立への意欲を垣間見る。

相馬市はこんなまち

人口36,794人、面積197.67km²、高齢者比率25.28%。相馬牛、相馬味噌、ずわいがに、カレイ、ほっき貝など特産品多数。いちご狩りでも有名。相馬野馬追や全国に有名な相馬民謡など、歴史溢れる土地柄でもある。東日本大震災による被害は、死者458人、家屋の全半壊1,512棟。現在はボランティア団体の支援を受けながら、地域と行政が一体となった復旧・復興作業が続けられている。



自分たちの復興は 自分たちの手で

NPO法人 はらがま朝市クラブ事務局長
菊地伸吉さん



相馬市のリヤカー隊が販売する物資の仕入れを担当する、NPO法人はらがま朝市クラブ。その運営は、震災で事業を失った水産加工業者が行っている。原発事故の影響で福島県での漁業再開の見通しが立たないなか、復興に向けて奔走している。

自分たちの手で復興を

私たちの活動は平成23年5月から、毎週土・日曜日に行っている朝市の運営から始まりました。これまでに延べ6万5,000人が来場（平成24年1月30日現在）。



県外からのボランティアや地元商店の協力もあり、市民交流の場として定着しています。ほかにも「自分たちの復興は自分たちの手で」をテーマにパネルディスカッションやコンサートをする“対話集会”も企画。民間の目線から、復興の手掛かりを探っています。

このようななか、本業の経験を活かし、リヤカー隊が販売する物資の仕入れも引き受けるようになってきました。行政と民間が協力して行うこのような事業は、全国でも珍しいのではないのでしょうか。

雇用を増やすことが第一歩

現在は、水産加工場の再建に取り組んでいます。被災した工場を借りて業務用の保冷庫などを整備。すでに1棟の工場を水産加工の許可が得られる状態に戻しました。当面の目標は30～50人の雇用を生み

出すこと。雇用を増やすことこそ復興への第一歩です。

長期的には漁業再開時の受け皿を整えるため、1つでも多くの工場を再生することを目指しています。このため、借りる工場を1年ごとに変える計画です。原材料となる水揚げ品は、県外に頼るしかありません。スタッフ一丸となって奔走し、好意的に協力してくれる業者も見つかりはじめました。この大災害で失われたもの以上に大きな“人の絆”を得たように感じています。全国にネットワークを構築するため、皆様のご協力をお願いします。



今は恵まれている。 甘んじず 自立したい。

仮設住宅組長 鈴木陽一さん



日本の渚100選に数えられる大洲海岸に隣接し、全国的にも有名なホッキ貝の産地だった相馬市磯部地区。市全体の死者458人のうち、約250人がこの場所で亡くなり、100以上あった漁船もほぼ全てが失われた。同地区の約370世帯が暮らす仮設住宅で組長として奮闘している。

ふれあいを実感する日々

「孤独死をなくそう」とみんなで努力してきて、やれやれ一安心というのが今の状況です。仮設に移った6月以降、毎朝しているラジオ体操には50～60人が集まります。私はそこで、昨日あった出来事やその日に集会所で行われる催しなどを話すようにしています。それが話題になって、自然と近所同士で話をする機会が

生まれるからです。

ほかにも、リヤカー隊の人たちが毎日全戸を回って声を掛けてくれていますし、ほとんど毎日、集会所での物資の支給や催しなどがあるので、顔を合わせる機会は以前よりも多いかもしれません。

皆で力を合わせて「新しい磯部」を

一方で、こういう状況は恵まれすぎているとも感じています。先のことを考えると皆、不安になりますが、いつまでも甘んじることなく、1～2年の間には自立しないといけません。

磯部地区は、天明の飢饉(1782～1788年)を機に生まれた「九十六戸」という住民の共同体が基になった集落です。私はこうした歴史を皆に伝え、その絆を復興への力にしようとしています。職を求めて離れざるを得ない人もいますが、皆と一緒に“新しい磯部”をつくるのが私の夢です。元の場所への再建は難しいかもしれませんが、100人くらいは“新しい磯部”に賛同してくれていて、希望の光が見えたような気がしています。

相馬市長に
聞 く

震災発生から1年を振り返って



たちやひできよ
立谷秀清 相馬市長

—震災発生から間もなく1年ですが、振り返っての感想は？

震災直後の命題は「次の死者を出さないこと」でした。行政として対応しなければいけないことを短期・中期・長期と処理時間に応じて区分しました。まず、地震や津波で生死の境を彷徨っている人を救出すること。次に、中期的な仕事にライフラインの復旧や仮設住宅など、暮らしの再現。最後は被災を受けた人や家屋、集落などの復興という長期的な仕事があります。今は、中期から長期への転換期と言えます。—市長として多忙な日々を過ごしてこられたわけですが、いつも心にある思いは何ですか？

殉職された消防団員のお母さんが「止めたのに、消防団の仕事だからと言って避難誘導に向かい、帰らぬ人となりました。優しい子どもでした。あの子のためにも私は、しっかりと生きなければいけない」とおっしゃいました。

今回の震災で5,249人もの方が家を失いましたが、死者は458人です。経験したことのない巨大地震と津波にもかかわらず、9割強の市民が生き延びることができたのは、この息子さんを始めとする消防団員のお陰。殉職した団員は10人を数えます。彼らの無念、心残りを思うとき、私はもとより市民は彼ら



を忘れてはならないし、復興によって償わなければならない。ずっとそう思っています。

—励まされたり、勇気づけられたりしたことはありますか？

今回の災害で親を亡くした18歳未満の孤児や遺児は44人にのぼります。親の代わりはとてもできませんが、せめて経済的な手助けをしたい。

そんな思いから震災遺児等支援金条例をつくりました。世界中に支援を呼びかけたところ全国・全世界から4億円を超える善意のお金が集まりました。全ての遺児に毎月3万円の生活支援金を支給するとともに、大学進学に必要な入学金や授業料を確保することができました。相馬市の将来を担う子どもたちのために国内外から多くの賛同をいただきました。本当にありがとうございました。

—最後に復興への決意を聞かせてください。

昨年9月10日に慰霊祭を行いました。遺族代表で祭壇に語りかけたのは磯部中学2年生の阿部彩音さんでした。「集落の人々を助けようとして殉職した父を誇りに思いません。父のように人の役に立てる大人になるため、一生懸命勉強して、将来は保育士になりたい」。彼女は、亡き父に決意を述べました。無念と心残りのうちに命を落していった人々を労わるといことは、彼らの思いに報いることだと14歳の少女から教わりました。これからは、復興の成果を見える形で示していかなければいけない。458の御霊のためにも。

すた 廃れゆく手業を復活させ、継承する て わ ぎ 小原かご 滋賀県長浜市

水源の里には、様々な文化や伝統行事が残されています。
このコーナーは、多くの先人によって継承されてきた匠の技を全国の皆さんにご紹介します。
今回は、滋賀県長浜市余呉町に約 800 年も続く小原かごの継承者、太々野功さんを訪ね、
お話をうかがいました。

小原かごは 800 年の歴史

寒入りした湖北の余呉町は、鉛色の空の下、冷涼な空気と大地に包まれ、凜として鎮まっていた。ここから北の山並を抜けると、そこは若狭の敦賀市、冬の日本海だ。町のスキー場のあった山麓を開拓して、野外スポーツ・活動の一大拠点となったのが「ウッドィパル余呉」。そこに散在する施設のひとつ「柝の実工房」の作業室におじゃました。

迎えていただいたのは太々野功さん（76 歳）。今では唯一の技能伝承者である。昨年度、国土緑化推進機構から「森の名手・名人」に認定された人物だ。薪ストーブは柔らかく暖かった。



小原かご。柿渋を塗って仕上げたのは黒光りしている

小原かごづくりには、しっかりとした伝承がある。800 年ほど前に、何故か高貴な皇子が京の都から丹生川沿いの山深い小原の郷へ避難して来た。郷人の暖かなもてなしに応えるべく皇子は、モミジ科の木を薄く剥いで木かごを造る技法を考案し、小原の

人々に教えた。以来、脈々と継承されてきたが、近代化の大波と小原集落の無人化とで近年に頓挫することとなってしまった。

「どこの家も、長男にしかワザを教えなんだんや」と太々野さんはいう。冬場の男の手仕事として、集落の外へのワザの流出を

長浜市紹介



岸辺からの余呉湖。わかさぎ釣りの人影が見える



平成 22 年に旧 6 町（虎姫、湖北、高月、木之本、余呉、西浅井）と合併し新たに発足した長浜市は、市域面積 680km²（琵琶湖を含む）、人口 12 万 5 千人余り、正に湖北の主となった。

旧市は浜ちりめん、曳山まつり、盆梅展など著名であり、そこに戦国時代の遺跡や水と緑豊かな水源の里が加わって、今後一層の均衡ある発展が期待される。

きらったのだろうか。「太々野さんは何代目で、次に長男に相伝されるのですか」と尋ねた。同席されていた「小原かごを復活させる会」会長の轟保幸さん（61 歳）がタバコをくゆらせながら「彼自身が次男やし、子どもは娘しかおれへんで」と合いの手を入れた。3 人で苦笑いした。

素材はイタヤカエデの幹

我が国のかごづくりの天然素材は竹をはじめ多種にわたる。

なぜ、イタヤカエデ（モミジの一種）だったのか。太々野さん曰く「小原には真竹はなかった。その替りイタヤカエデはいくらでもあった」。「幹まわり 10 センチぐらいのを根元から伐り、根に近いところを使う……」と。この丸太を木製の楔で割って薄い板へと加工するのだ。

ありがたいことに、残った根からは自然な発芽があり、数年後には収穫ができた。その繰り返しで材を得つづけられた。真竹がなければカエデ

がある。それぞれの風土ごとに自然の恵みの素材があり、そこに加える手業がある。先人たちの多様な智恵と工夫がある。この多様性を大切にすることこそ、今後のモノづくりに一層必要なのではなからうか。太々野さんに今後の見通しを訊いてみたが「さて、やってゆくしかな……」に留まった。深い想いは言葉に出せないのだろう。



講習会が開かれている「柝の実工房」



イタヤカエデの板材を加工する太々野さん



「小原かごを復活させる会」の会長の轟さん



太々野さんを囲んで板材を削る受講者

「小原かごを復活させる会」と技能講習会

小原の集落は、丹生ダム（現在中断）の建設予定地にあたり、9戸すべてが2006年までに転出し、無人と化した。哀しい物語が綴られたことだろう。「復活させる会」の轟会長は、町会議員を2期8年勤めた人で、ダム水没予定地の自然や生活文化を調べていたダム建設職員に、小原かごのことを教えられたという。唯一人の技能伝承者となった太々野さんを講師に3年半ほど前に会（会員約30人）を結成。今では毎月第2・4土曜日の夕刻2時間ばかり技能講習会を開くに至っている。

会長はシャイな人で多くを語らない。シンプルなりフレットのコピーを差し出された。タイトルには「余呉町 小原かご～代々受け継がれてきた技術を再び～」とあった。今や無人化した山深い生地への思い入れはいかばかりであろうか。その切なる愛惜の念が、小原かごの復活へと結晶したに違いない。

年配者3人で、昭和30年代頃まで農山村で自給自足の生活。野良仕事は元より兎狩り、魚獲り、炭焼き、わら細工、薬草採取などの話の花が咲き始めた。午後4時近くとなって、受講者が集ってきた。今日は6～7人の参加で大津からの出席者もいた。車座となって床に腰を下ろ

した受講者は、幅1センチほどの材を、かご包丁で削ってゆく。厚さ1ミリになるまで黙々と削ってゆく。世間話も出るが静かな作業場だ。講師もうれしそうに見守り、時には口と手を出す。触ってみると、削り終えた「板材」は真白で意外と柔らかで曲げやすい。かごの底を格子状に編みはじめる人もいた。

かつては、個人からの注文で作っていた。いくらかは近在の家々へ販売もしたらしい。今や個人宅にはあっても、古い製品を展示した場や販売する店など無いと、会長さんの寂しげな返事だった。いや、そうではない、復活は第一歩を踏み出したばかりなのだ。

【取材・文：坂根千代忠】

財団法人湖北水源の郷づくり

本財団は、平成22年1月に長浜市と余呉を含む6町との合併を期に再発足した。事務局長の山仲秀雄さん（58歳）は高月町の元職員。6町は全て琵琶湖の水源だ。この財団の役割を一言で言えば、合併後の周辺地域に「目がゆき届かなくなるのを補う」と山仲さんは語る。

財団の活動は、人材育成、集落形成、地場産業の向上など多岐にわたるが、中でも水源の郷「交流研修会」「市民事業塾」などが人気だ。昨年には、高齢化と獣害による耕作放棄地2.7haを保全。米、赤カブ、蕎麦を収穫し商品化を進めた。こうした着実な活動支援と小原かごの復活とが交わるのを願う。童謡・赤とんぼに「山の畑の桑の実を、小籠に摘んだはまぼろしか」とある。どちらの試みも幻でなく実あるものへと願って止まない。



伊佐の黒豚丼

750円～

いさ
鹿児島県 伊佐市



↑
鹿児島黒豚のバラ肉を使った「伊佐美豚」もオススメ。お酒の肴にピッタリです！

鹿児島県の北部に位置する伊佐市は、熊本・宮崎との県境に位置し、周囲を九州山脈に囲まれた盆地を形成。中央部を川内川とその支流が流れ、これらの水系を中心とした広大な水田がひろがる県内屈指の米どころです。また、金の産出で世界でも有数の高品位を誇る菱刈鉱山があることでも有名です。

伊佐市が誇るウマイもので、やはり外せないのが「黒豚」。全国的にも名高い「かごしま黒豚」ですが、その定義は「鹿児島県内で生産・飼育した純粋パークシャー種で、肥育後期にさつまいもを10～20%添加した飼育を60日以上した豚（豚肉）」とされています。その美味しさを家庭でも手軽に堪能できるオススメ商品が「伊佐の黒豚丼」。安心安全をモットーに、添加物を一切使わない商品作りに取り組む「夢さくら館」の自信作です。

伊佐市内で生産された黒豚のロース、肩ロースを、北海道の利尻島の昆布や枕崎のかつお節、喜界島の黒糖、地元の焼酎、味噌、醤油などのこだわり素材を使ったオリジナルだしで煮含めた逸品。徹底した衛生管理のもと丁寧にパックして、全国に販売されています。

美味しい食べ方は、まず真空パウチを5分ほど湯せん。温まったら、旨みたっぷりの煮汁で玉ねぎなど好みの野菜を炒め、ふんわりとろ～り卵とじ。お肉とともにアツアツご飯にかけたら、できあがり！

フワッ～と立ち込める湯気から漂う、生姜とにんにくのイイ香りが食欲をかきたてます。お肉は脂身の甘味が特徴で、赤身とのバランスが絶妙。噛めば噛むほどまろやかで味わい深く、つゆだく濃い目の甘辛だしとマッチしてご飯がすすむすすむ！ 豪快にかき込みたい美味しさです。

【取材・文】白波瀬聡美



↑
地元の新鮮野菜や特産品を販売している「夢さくら館」。食堂では作りたての「黒豚丼」を味わうことができます。

水源の里
発

おすすめ
ぶ当地
グルメ



【お問い合わせ】

伊佐の里ギルト・
夢さくら館

〒895-2635
鹿児島県伊佐市
大口山野 1145-1

TEL・FAX
0995-29-3061

営業時間
9:00～18:00
(食事処)

11:00～15:00
定休日 月曜

(祝日の場合は営業、
1月1日のみ休)

http://www.yume-sakura.com/shop.
info.php

水源の里
発



からすみ 1セット(5本) 2,000円

えな
岐阜県 恵那市

恵那市は岐阜県の南東部に位置し、北部にそびえる笠置山、東部の保古山、西部の屏風山、南部の焼山など、標高700～1,000m級の山に囲まれた平均標高約300mの山あいのまち。降雪の少ない乾燥した気候を生かし、細寒天の生産量が日本一です。そんな恵那地方の名物郷土銘菓が「からすみ」。

「からすみ」といっても、一般的に連想される珍味ではなく、米粉で作った蒸し菓子です。名前の由来は、桃の節句のお供え物に子宝の象徴として縁起物の珍味「からすみ」にあやかって形を似せたお菓子を作ったのが始まりという説と、中国で作られた山型の墨(唐墨)に形が似ているためという説がありますが、明らかにはなっていないそう。

しかし恵那市では今でも、月遅れのひな祭り(4月3日)に子どもたちが「お雛様見せて～」と集落の家々を回り、お供えのからすみをもらって歩いたり、自宅のお米で作ったからすみを近所や親戚に分け合う習慣が残っているほど、愛され続けている伝統菓子なのです。

全体に細長い棒状のからすみは、包丁で適当な幅に切っていただきます。切った断面は富士山のような形で愛らしい。見た目は名古屋名物のういろうに似ていますが、ういろうより弾力と歯ごたえがあり、ベタつきが少なく、ぎっしりと詰まった重量感があります。お米の美味しさを生かしたほんのり自然な甘味は、どこか懐かしい素朴な味わいです。

日にちが経つとやや固くなりますが、蒸したり、焼いたり、電子レンジで加熱したりすることで、柔らかさを取り戻せます。私のお気に入りにはクルミ入りの「焼きからすみ」。レンジで少し温めて柔らかくしたからすみの表面に焼き目をつけます。すると、外はカリッとクルミの香ばしさが引き立ち、中はプルンとモチモチ食感でとっても美味!! ぜひお試しあれ。

【取材・文】白波瀬聡美



↑
桜、抹茶、黒糖、くるみ、レーズンなど味のバラエティも豊富で、どれも風味豊か。棒状の表面には、桜の塩漬けがあしらわれたものもあり、見た目も華やか。



↑
お土産としても人気の逸品。全国からの取り寄せも可能です。



【お問い合わせ】

地産工房
「え～なも」
〒509-7402
岐阜県恵那市
岩村町富田1959
TEL・FAX
0573-43-2450
(要予約)

協議会だより

▲全国水源の里連絡協議会 事務局

佐伯市役所 企画商工観光部 企画課総合政策係
住所：〒876-8585 大分県佐伯市中村南町1番1号
TEL：0972-22-3486(直通) FAX：0972-22-3124
E-mail：s-suigen@city.saiki.lg.jp
http://www.suigenosato.com/index.htm

インフォメーション

第4回全国水源の里
フォトコンテスト作品募集

テーマ

水源の里の四季折々の自然風景、人々の生活や祭事、その地域を象徴する風物など、水源の里の魅力が表現された作品を募集します。

応募資格

プロ・アマ、年齢、性別、国籍を問いません。

受付及び締切

平成24年6月1日から8月31日まで。最終日消印有効。

応募料

1点につき1,000円

賞

グランプリ(1人) 賞金20万円
優 秀 賞(3人) 賞金5万円
特 選(20人) 賞金1万円

審査員

審査委員長 井上隆雄(日本写真家協会会員)
特別審査員 田沼武能(日本写真家協会会長)
井上博道(日本写真家協会会員)

応募・お問い合わせ先

下記連絡先、フォトコンテスト係まで
※詳細は、全国水源の里連絡協議会 HP にて
http://www.suigenosato.com/index.htm

全国水源の里基金の募金にご協力を

全国水源の里連絡協議会では、「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」の理念のもと、全国に連帯の輪を広げ、水源の里の振興を図るため、全国の会員市町村に募金箱を設置し募金活動を実施しています。水源の里を守り、豊かな環境を次の世代に引き継いでいくために、ぜひ募金にご協力ください。

編集部より

読者アンケート&プレゼント

『水の源』では、今後の誌面づくり充実のため、読者アンケートを実施しています。ぜひ、皆様のご意見をお聞かせください。

アンケートにお答えいただいた皆様のなかから、おすすめご当地グルメのコーナーで紹介しました「伊佐



の黒豚丼」か「からすみ」を各3名様にプレゼントいたします(賞品の指定はできません)。

官製はがき、①面白かった記事、②今後取り上げてほしい内容、③水源の里への思いなど、あなたのご意見、住所、氏名、電話番号、年齢、職業、性別を明記の上、下記宛先までご応募ください。

※当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。

※ご応募いただいた皆様の個人情報は、賞品発送以外の目的では使用しません。

応募先：下記連絡先、『水の源』読者アンケート係まで

締 切：平成24年4月20日(金) 消印有効

『水の源』定期購読者募集

本誌を定期購読していただける方を募集しています。

年間購読料：1,000円
(年4回発行)

お申し込み：下記連絡先、『水の源』定期購読係まで

16号の表紙

岐阜県白川村「白川郷の合掌造り集落」

勾配の急な茅葺き屋根で覆われた家屋が、同じ方向を向き整然と立ち並ぶ白川郷・荻町集落。豪雪地域という厳しい自然環境の中で生み出された木造建築民家と、周囲の美しい景観が評価されて1995年、五箇山(富山県南砺市)とともに世界文化遺産に登録されました。田植え祭りやどぶろく祭り、ライトアップなどのイベントもあり、1年を通じて多くの観光客が訪れます。

お問い合わせ、
ご連絡先は

〒623-1122 京都府綾部市八津合町上荒木5番地(上林いきいきセンター)
綾部市水源の里・地域振興課
TEL 0773-54-0095 FAX 0773-54-0096 E-mail: suigen@city.ayabe.lg.jp

第3回 全国水源の里フォトコンテスト特選作品



『秋霧』岡山県真庭市
藤原 昌平さん (大阪府高槻市)



『憩い』熊本県阿蘇市
佐々木一三さん
(福岡県うきは市)



『ボクとパパの夏休み』高知県仁淀川町
西岡 季子さん (高知県高知市)



『秋彩の湖畔』岐阜県揖斐川町
花井 美紹さん (三重県四日市市)



『水遊び』大分県佐伯市
田中 久仁子さん (大分県大分市)



『日の暮れるまで』福島県喜多方市
岩下 一男さん (福島県福島市)



『古木に生きる』長野県王滝村
目黒 鉄也さん (長野県上田市)



『視線』福井県おおい町
知見 治さん (福井県おおい町)



『雪の渓谷』京都府南丹市
井上 敏和さん (京都府宮津市)



『願いこめて』三重県津市
星谷 義孝さん (岐阜県可児市)

水の源 第16号

企画・発行：▲全国水源の里連絡協議会

発行日：平成24年2月

編集：「水の源」編集委員会

私たちは
水源の里を
応援します!!

全国環境整備事業協同組合連合会・会長	玉川福和
全国農業協同組合連合会・代表理事理事長	成清一臣
全国森林組合連合会・代表理事会長	林 正博
電気事業連合会・会長	八木 誠
独立行政法人 水資源機構・理事長	甲村謙友
社団法人全国浄化槽団体連合会・会長	上山健治郎
社団法人全国清涼飲料工業会・会長	前田 仁
社団法人大分県薬剤師会・会長	安東哲也

(敬称略)